林逸抄 行幸 廿九

和書門 類
一七六九七 號
一八〇 函
一三 架
五四 冊

内閣文庫
和書 類
一七六九七 號
五四 冊
二〇三 函
三 架

東

内閣文庫		
番號	和	17697
冊數	54	(29)
函號	203	16

国立公文書館
National Archives of Japan

三十四

御幸（ミユキ）

これはみかとよりて是を　源氏君　卅六歳の十二月よ
りおなし年卅七歳の二月まての事　此巻にあり又堅
大原野行幸は
えん打きかしあさからせし年まゐるに充
れなやいかたし
ゆく月しいうね半行し　まてつれ半年といへよう
んまりかと　さやくやと源しのと同しあつまえ
これとかの勝しそし　さかの源の女まつ公
けいかすく　きんれうく　川とふくに人めと我
せたのみくあたに　かう言行し　の勝　いよしそい
ふようんきのにれ人よるとは言行しの勝

あまたに落ちて人行て　又云よのつね人と云けるより
ありての事ありしのちは世のえんの中将なり
言ひて人々かしこまりのものまゐり　其人は深しと思ひて
の中将とありしとて今はさらに御こゝをと思ひても
給ひしとしてなく　其人は推参にあひける事も
後ねとれ翁なりにし　狩倖の翁といふ中将に従ひ
てもこさえ持さるにも給ひて見えけるにこそなるまと
こちひ給へとこそ見えたれ　よくよりて御ことりて給ふく
世にあんあるまく
ことなる人を給ひし　内の翁とあるは御ことりてある事
給く深しの書迹をありける人やとまるそか

されはこそ翁もかくいへとも　昔をやかたれおもしろく
給ひしくおもひくまなる紀は見えひなる後来の者
花波のこそ年の御初めよりもひとせ秋の夜
の月
かりくらし　みゆきのすゑと深しと　よろしく人しれぬ
あるし此歌はまさに太政大臣のもと　昔行幸は仁和の御
皇の時にこそ御さかりて代々ありき　さらに山ふかき
みかせりかはの千代のふる跡にありけると見ゆ午
のよろこひ　仁和二年十二月十四日芹川行幸それの時
事は延長六年十二月五日太政大臣行幸の例を模し
てけり　大略李部王記にみえたりしとし

されど　青白やとよしとぞ　西宮左大臣

なることひのうちに申けるに　高野中納言のあそんなる衣くえたる副

いまとひのすり衣にありけるはけの袍は綱にて

あり

あ紙文のうへの衣し　青色に延長六年大嘗節

約章　侍臣六位已上着麹塵袍ヲ今案主上は赤色に

袍をきし給ふ親王にて其装束御は赤色袍親

王公卿殿上補闕以下とつきものの闕腋袍とおもと下

にをばいろひ濃くきいにぞをとろはなぐそのかく藤保之

年大井河の約章にかつてありし色ひそめかまいすまし

也

たえのうにぞひし　青色にて纁綱云卿着地摺布衣

及袴（或用紫木蘭地綺袴）　小襖子（コアヲ）　餌袋　今案これは卿ノ

纁綱の装束也　布のさねの褶の文あつ絞きたる袴

しまのし或はもしされ本薬玩のこさねのうしねさきも

さてよしみそうり襖子はたにてきぬころれのすりろ

なくろをいくへし　冠は其緒のいうとさくへし　仁和

の芹河の行幸に約平中納言大纁綱の狩衣

に鶴を文におひうえしての纁綱のきえひ

かりのはにぞひし　白布のかつきぬに青摺文ヲすりたる

さしぬきのうへにしりえ紀こしあそみとすんぞ紫

そののたものひし　諸衛とは六衛府はみなをさへし紫末

おなしき光仁のとき 不同之 并見花鳥 右衛門左衛門
各隨本ノ字ノ字く
はしよ乾車ー 輪のよし乾車之見ゆのなく
うきりのりしー 柱門ようきりしをかけるなく
けれとのえめー むろうしつりんめー給く
あつしあるものー ときまうせう分一 此る事い行幸門葉
ちうに月んと同く弁もあと云ー 行け行幸に御し
此をとふまうり行あ弁ぬとまう行人さらき人 乾鳥まいに置く
うさうあうしー 行佳のかとくいさく人かれいくむろうの
なく
かうしのうらゆうりー 昌泰元年 野行幸之時車中之女

爭膽ル天顏 或古来身 或忘露面之見紀納言記
こうしまう行かいー 御門ようさうくてい皆かうあしさへ皆消
えさうくむろうのん
をるひかしのー 南云と 名をまかあへとく 御とやうと
るのやうにるてこさしう御つのまうり行人のいなか
しるやけ行あ見くむろうのなく
おそ行ら人いみあか物さよりけにー 御さん月くとにあ
へ乃そいをとう行つやうあれいましてとあ御
のあゆ弓みてよからあ行くものたくひいみかよくん
とやさよいそてさくまうくとれくれ人をとよう人ゆく
くさのそけんかて行ら人のすい夜そ兆て

青色のうへのきぬ 深しと夕青とく
ならし中将し深しと夕青とく
右大将の一 今案大将は納言にていかに宣旨をかうむる也
大臣大将は衛府をかね侍りあやにくなりけれは大将は
大納言ていかよりて随身をひらき出ひ給ふ也
とりつかはしめしゝ中のよそひといふことをもしろし
右流のいは宰相をしとおもや又弓矢を帯するをいふ也
いそ女のほかうひそとし随身のかんはんにかゝりける
之給ふ けさうしたる随身ともにわりなくとかくまうけ
ゆるしく 双馬の随身
御前よりそのかたへし随身うつくしきたちすかたとえむ

行
あれかしさゑかし 随身の中にことさらしなやかに
をとゝくはかりよそほひ此文随身小随身まうけさせ
く 御かとえんそまうてんかくはかりよし
御行幸おりし 大原野行幸の御あらまし
見しりまし 御くの屋形とおもくおりや御くの行幸
へし
御かたとそ御かとし 西宮記抄云天皇服白橡御衣延
喜御時天皇御右近馬場改著直衣云々 昌泰元年
片野行幸著御赤白橡唐綾御衣入野之後著猟
御衣云々今案野よ入せ給ては〔ことに御かく〕よその御服は御猟しに

かくあられし例もあり又うたゝねさめられたらんとも
ありしなり
亭子院より御日記に見えたりし　延長六年の御たゝら
き此時亭子院は宇多院の御子なりけるかへしその御殿
にて亭子院をのつかみたてまつりし御かへり
に侍りし人のゆきありしをたよりてさん
きよ給はりまかりし御前にて御使の宿ら御本につきまとひ源
氏の御方にてこに御招ありて
此の方より亭子院へまゐりて
兵衛の佐の御方にまうとて紫長にて少将行平弟
兵衛佐源俊喜と使いて錦一枚下賜
せられて御例となして兵衛のきぬたまひけり

うたゝやまとのとられたりし伊勢の物語なりける
しき弱きまゝに女の道をくねらんかはらば伊勢
としらせ給ひて御覚えてうれしく　此業平は七条大納言
業平朝臣よりは一首せられしを
之或は業平と是を書には梅花をかくし
寄りてかへりて行ても行之は
宇つれてしかのしまつき給ふは光孝帝行幸あり
めしけり御つかへ　此時にはまさしくいかに
嵯峨の大臣のしかは光孝天皇も此度は行幸には
仁和二年九月昭宣公の御ともにて芹川の行幸
此時大政大臣昭宣公之

かやうに沙汰ひとしれつゝよりけれは彼を源氏のかんむりに
あり
さて和山なるさし　大原や小塩山の小松原とや
つまり世のけしき　と業平の歌の
絵に太政大臣の代まて沙汰すとの祝て源氏の
事にわかれなかやかくれてにも沙汰て　又此筆にあれ
かたしかもりつ程のり幸にかたらく　源よりかへ
のやうく見えしは幸と哉けてよりみるき沙汰の絵
と代わり幸みても沙汰とろ給へはあつらく此方にも
てあそひけす
そのころひさしし　此哉かり御く　そのしわこさし

わこしうく卑ちお御く
かのすいし業平くのよひろく源氏の中将にさす
らくいしと云よりまへ源より又人の歌の御く
ら御つよそらくさし　源氏のみえぬ哉さんこともの哉さんも
シヘキトアルニヤ
あひみかりやとまさひし　ひろくれんゆくとしろうせ
絵とはひろつのんまさまうかせんとしそくろく
かのすとらくまよけりもとてたれさり
やくりにまのかいし　ひろくよりて源くの御此御く
うらこさしし　ひろくれ元く　川井こさし　宮にかり
沙汰すりに　哉哉のさ様に歌めかく　今業平

こましは五音八音のかうらうやしく宗のひ
うらはせつとたへ人かくひ　うらきよしはくりうへもう
こそりさんへ好年よ名残をしくはかなそこく
ほくへきしよ面白し　咲
世の中さいこうし　家隆へれすまいりつれは
と有り
色も尽なし　定家まいりけれ　みせとなかて
ありけれとし　源氏の物まいりの家隆への弟と
定家へ法会しのゝて
こそおもはれ此わけなし　まいりと定みしけれかなれは
みて内侍のうへにまいりて　せんは中将の出ん色へまいらく　咲

中将は秋好のかく
かのきつよま尽きれまし　内府へまいりけれ尽せ
中にも又女御の内府の出し心を尽くして尽きぬ
案内のまく
まいらせひとへはし　まいりには中将出仕のかりにたて
いり給はれその給く
大殿の足そし　まいとこそまいる人の尽きぬ
示可きへの心やはへと思ひ　此をはゝりしくをきる
とりとは中宮女御の御かたにまいりけれをとり給
ゐすく
おもはれそし　定家　御ゆきしよろこひ　源氏に對し

て参らせ候べく
いくたびも〱　御の御心にこそ　はしめしまいらせ候
よろこびて　めでたくそれにても御きげんよく
又此くに御事よりはこなたの事まで申し　めでたくおぼしめし
候あれはとをくに御ゐなどのあまた
めでたきすし　二　三月あまりさしむかひ　まいらせ候
かさねのしるしとて　ごいまさんにすこしまいらせ候
御まへにも御ことし　まいりて　あまりさむき折　御あつかひ候へ
はしめてきぬを　はる　ほかへ　まゐらせ　つかさの御かたへ
御ゆるしなく候
かしこ　まつ　御事　のこりの文の御返事まいらせ候

かしく
めりさし　みやうのもとあまたく
めのとにも御そねし　御事のめでたくぞんじまいらせ候
まためでたく　おまへにも御しをりまいらせ候
よろこびのことをわすれまゐらせ候　ひさしさ
とつめてこなたよりこそ申入候はずつ
あつまりてさきに申候べし
ひさしくまゐらせず　御ことのよしうけたまはり候
やよひの中ころ御見まゐらせ候
きさらぎ中　めでたく　二月十日
めでたく　めでたくおほしめし候べく

それも大家なとは其のかきりにあらさるへし　されは
とにかくは世の中ともなし

氏族の外にほとこふし　姓はかつらひは本家の嫡家
あれはいよいよ氏姓もかはつてほかへそうつねうす武家に
後に此家のふかれはくらべられぬ之体もかはらすとし
子孫はおほやけと氏姓まてかはしてあらためて一栄
このりし勢よりかはしおほくは此家作ておほくあれ
もとは後にはこのさえく人にして氏姓とはおもひくさるまじく
主の姓の此なし　同かるこれはもとあれかへるへ
藤原氏とは申へこさま源の此家氏から同
等のかぎりなつて主姓の此よりたまはんとく

源氏にはかはれし　源氏とは姓氏の此事にてあらんとく
うはくしさし　平人の事なるとは表の事なし云もとく
御かうかねとく　さらんゆうし　御の人とく
はやうしゆひかし　まうて此ひきれうしゆひよ同氏
としくと請なく三宗乃　大ま氏此家か三氏まて之
是なくのよし此のなり同云　男女さまさまにねまりや
むかしより此ゆひまは同前とありゆかん氏姫君のいまは
好のまゝしらる事　又妻事は年齢不定まや
一度ないしは積妻の事は三歳くらゐは不定之一歩
家かりとやとも云く姓あるにまゆかしもせよし
きんのはんく

かくしての御はしきて内府よりれいのすく
すゑのことゝもよろしきよし夕霧へこゝのとりひて
そうにいはれんのそりわくいは御返なく
きこしめさせ給ひし ありし事 五月の祝あへ
し
かくする世の中に大臣のいまの世のうちよりまいりて
の年と内府へ大臣にてはりりけるさんとく
ことの筋はれとのひし ありしことにとも
大臣の御ふんとく問やかく御返り給ふ
いまは御てし 御よの事様よ気さ入給へはいなり
もとのひやうふとひとしにあるこさへ事つらし給ふ

いくらの御心のうちし 大臣さへ御心のうちも給ふ
小君らもよろこびあへり
おほいとよろし 大臣の御
宿うにおりしなかり 御覧じ給へ いまさらにされ
はしめてもきりけるを夕霧のきみ見給ふ御
に御心もとろうさてまいり給ふ すかたしのおさへ
夕霧の御
うら御とみまし 御心の内様の御事 太政大臣
かくましきせさせて内大臣殿とゆへつ給ふこそあり
かりしゆへすへくよろけくとはのとう給ふ
おひ御ことなれはまいりし をひ年よりてとうさへ

中人をもいやしおもととく
相逢しくしさかんしやうよし　相逢しくしさいとりうとくく
やかれかとれ年よりおり孫とも　まなと思し由なし
く物うきとは物さきこまて深しの沙く
年の深りれふやとと　大事れ沙く
おもらひを給し　おね大事乃付の郡年余く
はけれのいそし　夕暮れるまく
さうしきをわれいし　きもちられとく
出る給うまし暮しれし　大事深しとの物うく
ゆくそもし　深しの付内のおもし毎日出極楽と申す
生れとしく

いそきこてあさせんとし　むかひのすと門前へ出けれ
とらん深しの給ひく
あやけめのあけさまやし　又白ゆくかけすうなるのや
れすにひとりかそうわこをう文書えの給ひしかれ
かうしれよりしく
の給ひけるやうにし　大事の付
すねのうわし出まし　大事の付を井のうられよと
の給ひ人用ひとく
といひふこさにくし　を井戸のうちと夕暮れあけ
給ひとりもかてとうく
らうひ給ひくし　深しの給ひく

いふかひなきはゆりしてし かき給さへなれてこそ思ふ
なをて給へりしまく 又いかなるひとにとりや
こふきもゆへし ところへしる雲井の雁のことを源氏の上
給しまく
きこひしりなさりし 内府の雲井の雁へ富道のこと
せいり給しまく
給はせそし 源氏の御内府のこともいとかなく給ひ
御源氏の名をへゆ給し給しも名乗しまく
まへ行のまかにこさまなりしすゑし源氏の内大へゆ
しててよる給へりしまく 洗濯の女ろの内よりさまを
いかすあり給は又たれもさるゝまかりまく

かくるゝをこさによりて末なりし 源氏の内裁つらき
なれまく 濁悪世と云ふ雲井雁の事を被仰いかり
なりしんとりかゝりしも末世まいかとらさらんとも
あるへき稚給の人のすく多こそとこそあるへ
しとなるまく云まく
かくもしほなりそし てひいけりていよくすゝる
しまく 嘶ての給也一条
かき申けらなりそし 世となりてもふかくの給く
いと殊くこさ給なりし 雲井の雁のまへ夕霧れむ
よそめすとをひ知くなりて内れかゝれいと堪
こまく

きさいがねまゐりぬべきし　猶仕まゐりぬべき人〻をとゝへ玉
ひてゑらびて源しの内侍を
その例はし　猶仕まゐらせし其の御代には内侍のね
とあり
あそびらは御代れし　ためしにおほくの人まれ
とも　殊のほかにすぐれたる御ことばさがりもなく
しるく
うらは加はせられし　まゐり　みかどと申させ
かせしら給はりし也　源しの内侍
内侍のかみ更衣ゝ人まうし　内より源氏の君の内侍
かれ此あすとすゞかしとかうてたまふ人と内侍と

ことにすゝまゐりてとれしやすきんにく
女官かし　はよ召んとよし也　内侍所の役人のうへ
内侍のかみれ　今の女官也
くはまかれぬきられし　其比の内侍のすけ二人あり
さらに又内侍替とのそひ人あり　延喜式云
内侍内一百十人尚侍二人典侍二人掌侍二人女孺一百
人　余ハ畧之
又まうす人の加はりてまゐりてし　為にたぐひてきこゆる
殊に人のいと可き成仕まゐりて更衣人のうち成るね
人は内侍替りに任する事や家によりて更衣人れ
あとゝもまいは又人と為まり定まりしき

哥のいしきへし　我家にさすすあり人はおもはん又哥の
いとおもしろくそうらんとおもひあつて秘しまに哥の人
こころさりくれ哥風をまそうらんとえつらはうひ
うらんく
さらふ時こ記さし　まおもはん人は思ふと名れ
すをしも哥の道の人とく　古今のまけ学の中に
のすんさおりの人はまうくれたさおりかうし将
とく
大かされおもひてとうにし　御よりさおりに政をさせし
ここさし将く文字哥の人ともおもはまろきおもはしさう
せられへうしとまる人し秘して

うけおほすとしし　代より御しへつらは侭く
定家へいさうへこさまらおくし　ころきもうれさまし　定
つらへきらん古あろう事し　将りさる人さ蕃とら女御
定家に御の将りて　くま氏出云人おもて　おもれんそ
人うさうすりけた自え　内侍のうとおもて後あること
とさらくし　かうしそまうつと低をつてさんくし低のた
まふ
たやけさ母かくし　定家へまさくしてよう石のうそ
おもひしそんさうすつみくあれをつたうすなくる有
御ねかくめしてさまういろかうしこさやうされてかくし
されし人つにしうく人こさとすふへふ

かん清寺れやうはあはれされとし むらさきと門徒の
うちにかやうてとも世上の路事かしかねくまん
とむらうはおひ給へししく源しの人々
かくて文さうし 源しの詞 むらさきにうたあらす深草や
よせひ給へ源しの人に信するこきくの子ともかなしく
とく
さて親方れあつきあつかりそし 源しの詞むらさきいまう
すゑとしいうしあはれし華のすいくてう一心のあく
あるかしよと源しは世をや清くと敬りかしよりきえ
よそひの作と為とさひし むらさきのそうれらえ孫〇給
ひしく

かのかはんさるよし ちりのかきあれさよう五部はんるえ
けるはあさき源しの書は姫君にかくあつまるひの折
ををいこうけは内大臣の姫君そあつきるとく かやこと
かうなきんとく
はかんへいとれとらとし はかすそと内大臣かしと
むまはせんとく 文むらさきの文任れるすと内大
臣に結合あつされた 源あるとく
ゐかやうまことつけてし むらさきのりされすに書候
あつされとも大文のはよろひよりはいつくまれ
かくにむらさきのすかたえあつりかやきねとく
利しもえんかうし 大文れはかなやうにすつけこう

ゆひゐてはら給はぬと宣ふてみえ給ふとゐひとはる
給ふとく
よろこひおほせられし大夫は忠臣と御前に候ふ也あ
まことく
いふへく候はし　大夫の領に御前のまへにはせ参じと右
のりおもくおもしとく　それの兵衛すく
いかにこころみく叫てひきさるく　おほしそて源氏と
い給はれとく
わしろけ由りてそし　むかしのなりとこしへも
見給ちてさやうに成ぬるやとく　一条　大夫は領
源氏の憐愍の人ともろくさし年しちき夜

てやうに宣の文はまとさしと給く源氏の此よし一条
こなたのりまや成ぬると南座の谷はく大夫の
給へつたへき　源氏と文と共に遠く申しに義に候
とけは由りて　て給ひてさん候
さるやう候ふなく　一　大夫は仰源氏の同人とかう
のなし
なくしさし　源氏の仍に御うけなりは大夫これへ
むろの源氏の御まくまたおはします
のやうおはれは中さねとく　夕暮まして心よせぬ程に
にかまひく人まの給へおもて大夫は此はきぬ給ひと
ありり
こちの御かひとのかたし　一　内府はさてかし源氏の一条

の宮への御さまあるへし たきかとも御しのやうく
中将ハ夕霧也 いつしきハいつきりし給へんくも
らうたくことくし給ふ也
此君のこさんうゐし 内府より学問を御しのやう
にて御つり給ふへし
まうちきミたちし 給ふ人すいたへれこさんうゐへし
藤氏の御かく
此ミ給ひし 何給ふへく 御とききてよろしく
うつらもまいりてきとし 此御あらんとせん此御はらうたま
いつせ給ふへく
宰相ハおもひし 大宮ハ内府への御心なり

これうちやかし 物やうに文まいらせしいてそあるへ
に此君あれは
おもひしはらわんし 内府の心を升の后と夕霧升
わかせ給へとら御まへ見てし
又とう此世のよし 内府の給
中くさう御しも大宮も物かせあれ ひとへさしまく
御まおもて物思ひいまねし 夕霧ハ心升いまねと也
人のいこともし人ハ此君也 内府の心へ
此人を付しあなたくし 内府の心大宮と御しとさし
今くの給つるいつとへ 夕霧を升后ハなし
さしもあんと思ひつるいつし やあらいつ 内府の心あや

はへるとや
あけぼのはもろこしの内府の様く
いと青うふたにし宮様とそおもひやられ侍る海のうけ
ぬるなり
初のうちあるきひしかりし歩するにのまゝ内府の
ふる様く大臣といふはうらやましくて
えひぞめのさしぬきし　直衣有様く桜の下かさ
ねは面白からうえひ染く
はてめうれさめし　是は布袴（ホウコ）といへどもいはゆる
冬に出かはにはれきぬく下襲とはみえて大臣も
うらはそのえんの宴よりおもしろからぬなれさいる

あるへく
ひきしそむすけつ様くし　是をむかへとらは源しの
ゆかひきはちらひ様くゆかもり宮とは披侍のゆくく
みなく是しれあふれ川はちらひ様くゆかもり宮く
とおもへとも云ふれもひおぬと源しの御宮と
おわうく原　内大臣の是とくしきし　源しの
川はちらひうれふはおもひてそ見えてもや　休　源しの是
のすいやちにみなすしそうち部とまて内府にわらひ給
けると也　清　是は皆　源しはなくる　休清同上
ゆへそはにて宮仕にて　是のおうら様く　又おもふ給
つもふく向とさうて内府のみ□し　様く　休云は一段の
おもしろく

黄衣紬衣 素衣なと又しちのかされ身なりく
三条の又 縁ふい袍を服く
ふんかは位さしくまし 内府の子なれく
夜よりくの事ーいとまて 内府のやとしく
物語りにもあらし 当時の人の物かたりにも見え好色同
あり
おもしろからしさし 内府の女御之源しくれあひしらひ見え
伝つるそい何とらし 致仕大臣の君そいかりし人
とくあきれねとらくまい世くい 此さかしらく
此がしじやしくてく
かんとらいありとし 雲井居乃雁を初めし致仕源内

これはふやとし雲井居のやまひとて 内府の人々
むしおうし 見くらうかしき物がたらとして源氏の
詞く 大和のすとい 世の中をよしく
もねとおうし 漢乃四皓ゝんあり 四皓ゝ恵帝く
御位ゆらし 時高祖の夜相国臣成とこり 夷我あい
賢人いも称しされしくおかりく 又源とは致仕
の事とるくしひかるまかや
うられまさくし 内これとやかやれ顔とした
もとけさかかへひとくいし ころそいとめこさん 内
大臣ふく云すとかの様知あまく
いつきをひそきむさきをそし 此いつきかひとそむさし

こゆく御前をとゝのへて 同しく 弘徽殿の人々も
いかへいつるよし うちよりかしこまりてまいるへしと云ひおきて内裏
の御前 弘徽殿にそおはしけるにいとゝ
といくしきまゝに こきてんのかうのきみ 弘徽殿にまいりけるとて
こゝろへてし 致仕の大臣 むすめを女御にまいらせたまふ
なをしくそたちとて ふくすりすゝめとて 御ゆくりなく
二条院にして八人みこの御おほえ 尚侍にまいらせ給ひ
その後のまゝし むかしのことを思ひいてゝ 源氏の宮へ御すゝめ作
られて とく 大宮の御方にまいり給ひけるに
かうていとあはれなり 致仕の大臣もおもひ 源氏のむすめ
のすゑとうちあはせ 内大臣かき給へ

かくのほとにて はらはし 中将殿の女御の御かたちの時の
ならひたまひて
むかし人ゝすみてし 致仕の内大臣も給ひあはれみ給ふ
かきなれくなからへしと みしゝかなとも源氏
給ひ なれにゆきしと
かめはしへの御ゆきの ゆく おはしますかゝ六十ゆく
ひとし御はうを
きゝなられたゝとし 蓬生の 大方にみえて
ありふれたる いつくしうなりしの かたちなるを
かしこにはすめるかとて
一 末摘の御ゆくしとのく 宮の御方の源氏の中将のふみ

ふかういかにとし　寛和にいふうちめしくふかきを
かいを頼しく　白井殿のおとゝを給　往の川ちかしかしく
ゆくと源しよう源氏しかんとけさうしあまや
いめかくさるし内大臣也白井殿のおとゝ中納言之
こまかしかとうりし　内大臣の御くんつのかうこかり
とふらうの紀ままさまきりんとく
さらは中宮やうなし　源しの御
こさらしはし　むかしの嵯峨天皇の御のとく
かおしき　としらうけし　源し内大臣源氏也さりんかう
給り
又いかなるかは御かうし　はすしと云ことを白井の源氏也

半ともらんぬる人々にはなし　関白と源氏の内大
臣は世のかたかしは又何事をもとへ人々とかく　半
かゝるをりは　しむかしの人々は世の人々にたえこゝ
さきのそんさうし　むかしを源氏のくもゐ近衛
ゆへしとの内大臣のなり給へ　半
御人もおはせしかとし　竹の御らう御もかしを
源氏の我朝のれいしたしかるに雅為しゆく
されとも寺とらんさうし　内大臣の心むかしを源氏の
ことを記給のねかくとこ源氏の十巻なとしく
かのちあらそふれたるし　源信乃人々よりまことこかこ
より源氏の世にもへまいりせく御しまうへ人のかく

ことしもたひよりし 内大臣のむすめにはとて内侍のかみ
女御まゐり給ふ よろつを見へはこやうなくなりて
わすれしことも叶ひても源氏へまゐせ中さんとて
十六にしてそうらうにとよしくつるハ日より八十六
てにと源氏のむすめへ中給ひんとてにんは咲ろとて
給ふことなりて
ようりありし出せいし 太政大臣は[illegible]さとて
まいりまゐり出家して 源氏のむすめまへいへわり
て内大臣けり給ひ出家まかり給ひて内
太政大臣ハ給へてむすめのおひらひこととし給
とて

かやうにてーーむすめのんは源氏のやうに思ひ給
らうたく思ひ又は恋しくとられしく給へ
かくてのちハ中将のーー夕霧ハむすめを内大臣の
のむすめと恋ありせ給ひ 源氏のんへ
あはれなりやしんありし 雲居の雁はわかき人
源氏のむすめハそれ給ひしと夕霧にいはれて
さはり思ひしかすの思ひしきとうらてされは
給ひくと思ひ合給へ
かの後まかこさへし 雲井の雁なく
御思ひ給ひてくし むすめの〇は〇
とられねとく雲井の雁にむすめとろねとく

えんしきんかうしとうかつらんの百首のうたよみて
をさ宮の御かへしとおもひくれすかたをはなれさく
やしなはれて
まゐりしきものし夕霧をはひたけれともかゝり
とおもひくしなかと宮かへらく
かくてそのほかにもとも母のゝく
けしくなし尼君はかの太政大臣より此姫の御ゆへ
かの御母めしさらせたとし　けしくしきとて甲下かり
さうなかつ命令かにたちさとおやうなく御さら近
おなしまけなるきうらし又も姫の御へふけなく
さかとい女御のおへ　女御は太政大臣むすめし

かの源氏の御子のかくしもされぬんとおもて
こまにとよふなり
さうひくかんし右よいそ后かは成なんとても　又
さかなりしきんもけるは御元をおて源氏とく
こゝよし　ちゝ太政大臣のかへしさうしとは内大臣の子
にかても源氏の御子にても太政大臣なれは　孫なひ
りそゆけしとて冷泉院の御母なれはねとは冷泉院
御子にても太政大臣かしきつねにねとく心さとうけんまち
養子の事をかよはしてく　娘との御なて
こみかみの天王　継母親母同しと云はみあるにも
てそう
これもこかきにおりしゆして一源氏もまかりれ身に

一 又おかしく
いとやしいとましきん之（紀） 又かれる月くもなき山よ
を深しの相ち給へ 様まちまへてゐより部ちらく
承わし思遊ちへし
此一字は中にし はちをとしまうひ給ひとけりし世の
人まへちの事をきかしちる批判しいほしまてはひると
へし
中宮よりし 秋好のうく
わくしあけのくし 發あけの具足とさまやむ
かしのこ紀かしし こ紀めい みかとの方く
むかし此院のへるとし 言院の東院く

おほみひめし 服衣かへても用ゆ無位 一説青鈍は服
君が孫とまうすは女御のたちひは出服之也
かちくともやし うきおの人のけさ のまゝ猶深くそ
をこへしむ もしれ人のかへてとまへしきよりたち
すまれさるところ
おほせのまつりし 無位は中宮の御服之也（一説）
あるとみ相しり勘へし（一説）
まてきり見給へし 世の人の事はこころとよりたる之
惑給ふ思はなるす思ふは深く立と給わて深くる
名人之は叶
おほかたのかうらさし ゐんまおほかたの文之あるあれ

ちやうかう体

ゆくゑいとゝをりてたし　衣もことをゆくらうろく衣
とし行ゝらうく
おいてかりし　なとかしき風く　双乃須く
おやらんし行まくし　すゑ行ゝしよりれをくるなを深し
乃やらんしてよく
かゝ物行ゝし　杖かつね人冬く青行かと見し　人かと
みる鉢改あるくき冬く行く物行とまゝる人とミ
く見ハ木の本れ人のらくさの行く
人まさとゝうんハしし　来橋をたるうに　君りめす御く
さるまもちの風しやとくし　さるる人有しれもれる

よの花ちの風し　さしとく
老りもちのし　来橋のかり衣をゆゐるよるを松く近
ふよ文らのひたるとめりれ
飛鳥ゝそし　来橋のふくまゝんとふにようし松く
川かり衣にて夕暮有かり時ハ衣をくも人の色しさ
ちくらこえりわらしのひらすつ行き風くえらいれる
梅く去かくも風ろく
おとゆくこ春乃し　深しのんく
ましてとれちりかくし　とろきりけんとこ流まり
風めく御後乃ふろろこもしら行く　御後のいね稚まふ
の思ろんもゝりちう行しとく　深しの来るひをたゆり

かくて

いくほどもなくはしまつひよりなれ出すいは

さいはひ清しのあるべきとて 吉備ものかたり

なとあはれなりけれは 袂はくるへとあふつのとまつり

のまへなこそとれいつしともかりつ哀なくやうたん

神をとめつくして 住まゐ方乱もなく悩けれなりける哀

あからさりしにかなれなとまとりんは見はなてつ哀となす

いふ哀よとも 佛の御へまよりつる哀又かつつ哀くことなるもてよなる始

へうへ御時のいふへ

あやしうへのけたまひしまつひしへのいさかまり見へ

かへりもしー ゆてそとは哀文てさいとさふへ

なりては御やうまし むらつのたまひたまへ

あかりてかしー むつかれん御まつひとてつかなし

やかやと清しのかほ方とて 打しかゆ給へん御たまひ

こなしへ

もりこといつし御の ありし哀とふりしれとあさす

く又なやまし手かかさとや 又うつゆえもそまして

まてものおりしたれとめしまや 双方れ消へ

これらひしのかしー むふれれすと水給へ消へ

ちくさいつ給へつー内大臣 宰相へ出いつ給へ

又すさそーりとされ こまいこたに又そふへく

にふさそ清れ集まつんと 桃待のおれへ

やかてまゐりしむかしのりきたる月忌とく
しくめさるゝと内府の気色にて やかてかへりては内府を
めしよせられて御たいめんありしこと いとおもしろく御心の
ほどかぎりなかりし御ねんごろなる
いの伴ふまて りはれあるなとさく
まいりたる事なとはしりたり御のおほえいとゞかひおぼしよ
人々も蔵對面ありて事たりけるやうなれど 灯をとをさせ
よそにするとく内府へ今日かの院さんの人ゝ御ひく
いかにゆかしと内大臣の御くるまつゞき申くだされ
てはたりし御かたらひしもおかしき御ことにて
こよひはいつとゆかしゆかしうけたまはりけり

御元やよりて御ぞめしの 死にたる後のち哀れ
りしとおひをえぬことえぬ御ひし 内大臣のともゆかひ
てえたりとめでさせおもしろくあそはし 奏 あつまりし観音経
半とはえさせおはしまして物うちさく
いはんさたれはいし 御の内大臣をいりつゝ
とれくとかはかゝひしむさはれさして心ろとく
人の後にさしくも 多くのうちに見えつくなる 悦く
姫君のことにうてなりいれと来ありしにもいくつつく
さるのかはりけ御の所とさく も 又多くのうちにと夜い
能えあれはや御 得はねとの御の詞
はふかりをさてきやうさしーき乃おとゝれ詞く

あふをしいけくのなかに中つきかかうとへ法師
の思ふなりとも物かはしけ行しく昔
ぬかりけし　双身の地や
ならぬはしこまりし　又むかしの御人よりも心もならへは
とらは京　源しとりしこまりなかせしともむかしなりとて
またたちつける花ねを根すりとく
うらめしや　内大臣の心やかくさきむきとは書きれ
事あり
いそくれ雲のあはれとはむかしのみくはかなく内大臣へ
はなれは花の雨ねをとらへにはかなくむすとい雨まなる
書きを見つくおこさりむすと残る事あはてしよあこ

此撰まくつきさはのたへ大車よりゆかしよいひけ給
ものめのうにとりさつけても色とみし　ヨリカレ行せ今は
つくれらるも残ると人御夢清むをき　ヨナツシ方みて　よき人
かくらかくさなりのすなわちを心ねりくゆとなく
しるを知なく
まつれ給し　内大臣のんとよあはれんすとい給はは
よせより鳴ノ事く
姫君はいとをかしさし　むかしの御く
よく心こし　源氏の心くむかしよくかりそこふ
まりのよしく御明く
いとまりかくさらん清弟しと給し　むかしの御まま君

あてにきよらにおはすれは源氏のいとおほしおほえ
むらさきの上の御いもうとをたつねとらせ給しとそ
なり
いとこにはなんし内大臣の御むすめとひ弘徽殿
いとなつかしくおもひし内大臣の御むすめむらさきの上のおほえ
かたみとおもひ給へしくおほしめし侍らしなん
せめておほえさらし内大臣の子に
人よりもことに中将のきみむらさきのおもひいはし
よりてはひらかし事とかくさかひ人なきかし
よりてかしくておはす
かくれさせ給ふのことし侍りし人の子なとかし給ふ

ちかきゆかりなるをすくせと源氏の御このみことく
たれきこへしかは源氏の御むすめ内大臣のきみ
子なからはしなき人にもあつかりしかの御ゆかりとも
よふそ世にもありし按察源氏のおほえ
なやまし給ひて人にもたし源氏の御母の人となりをさかりのはしめ
やそ給ひておもひ給へるはく一品大宮の人々そはし
こもりおはしまする孫内大臣のかみとのたちゆく
これをとゝめさせしむかしの按察大納言源氏と内
宮いろくくたるをおほやけにまいりて宮へと源氏
の内大臣へとゝへらるゝなし
すゝめてもてはやし按察の世とゝなりし御心ふかくもて源氏

のちに心せしゆゑにやとみえたり
さきの世の一 内大臣の御孫のうちにうるはしき
ものなり
又さるへし 鎮信(?)源よりきこゆる世の給へ
はかなきこゝろけし むかしの實父たちの給ふは源の
ありけらし 源氏の給ひきゆへたゝかしたまへ
ことかへさんとて 内よりの御すゑさかへ給はゝ
むかしとはしてよせなく かへさんと思へ
こと為の事なし 内よりやまし習を知らんよの中へゆかし
らせしなく
御来つゝとたかし 内大臣の心むかしの思ひ給へ

源の中にしくものなし 内侍のうちにかくれなき
はかなしとき月へゆくよくらく中宮とく
いまそかの内侍なし 堂の古き我子と人のおもひか
をとゝ内侍の蔵人所にありしなく
女御なりけるは 弘徽殿の女御 内大臣の女にむすめの
まことに人なりけむうらみなき給ひ
かのされ物の心しをし為のなし
こそまりてかくそらん 源と鎮信のかたるゝなく
おなけよし かくし紀殿へかくいひくへ中典侍と
さるとたりひし事をし 中将の御へ 柏木へ
ある御しをし為の御へ

定家ハ人みなしりたるさし　近江兵衛佐ハ女にみえたりて於
われそしそこなひてまつて嘆ふとやせらく
れまくの詠くし　女神の小ゆすし
あいしのこあそいし　長兵衛の柳くいのこゝんから我れ
常我のそまのとある　さり給く
まつらくし　よハ兵衛てらや
いふあやまつらし　中将のゐとハ兵衛とよろしし古や
まつらく
かねいろかすそし　吹る月ハかけり後のまくかねと
いきとあくさかろ給く　紅梅の兵く
か花若かしあて宮ふかし　日本紀曰一云天照大神

蹈(フンテ)堅庭(ニ)而(ヲ)陥股(ムカモヽニフミヌカシ)若(ニ)沫雪(アハ)以蹴散(ケハラカシ)　今案カタリイハ
おいる此庭とあらくきらくそこのさとの見えしとも思ひと
天照大神のいかり給へる時まつかのつさとし給ひて
いさめひとかし給ふ時のまへつる此庭とも宮のしく
宮らうし給へる天照大神とこそ見えたりとの見へしとは
此せうとく　今おはすのこゝとよまおかれらしいひれは
あのうのさるかうらくかうむをとうとくへうへとひ
久しくかへれ此れの月也とかな宮とよくんらへ内大臣
のいさめひとのらし
中将のさくら見若しー　中将ハ兄人おかへれ兵衛かはかし
とく古今彼式房ほよ嘆蓋鳥兄弟ハ一云天照大神のれ

こゝに申すとおもふてこれはしくし　さは源氏に
りうか様つくのやらくにさくうち給うてあく御前
申す給ひてさうすよりうー　戯よ　ひくうる　女御也　とて申す
ねんいひくさうりうわゐようとさうし也
おもひくと申されし　さは源氏の御子
御子はくの御ゆのー　女御のすくとはの源氏御子
いそくしー　いそうしさるく　とは源氏御子を申すさらん
申す
さりまらし　なひとのわうふきを思ひあわせきかせく
御さ給し　いうまをしー　女御の人とは源氏内侍とめき
これわかとある御しとく

御とひとけさやうよし　御といひくさう声人よろしうね
さる人とは源氏の御子
いと給くてさうこひし　内大臣の御人とは源氏の御内侍
のさる御あひさうしく　言うまうすく
あいのつこれすはー　内大臣の御人内侍のとくとふと
内大臣多くは　とくやさされぬうしく
いとれしうし　とは源氏の御子
夢は　さうしさうし　耶鄲の夢申すのんく
世の前の御さうさうし　おもろこさうんく　世の中は
とけいとひゆうくさのすれさとくく　胸さへ申すねんく
又さうろんく

きさかりし　ぢりのまへ
御ゆくひくし内大臣のきこしこさ銭らへ御つて
御きて御くへ御人しるまでとしふんて
人々いそのうらまし　小乃御まへ　まつりとも御ん
ねらぬりまへ
仰せしものやうましまへいまうらひらぬるさと人々や
とひくいきせく時しあのりさらしてを仰せ候しと申候
御人の中に御半ま言をさくいもしとへ候
まつりてくいし御まひよりにんゐ世ぬ物に御く候
とく
あしりのむかしさし内大臣乃御気のまつ時にある

こ氏君のつりしくまうし御つて
世の人いもらうてうりし内大臣の御氏君氏よろりうね
もちをおとりりて　御ひあつひ御つて　世の人御
くさとく候

御幸　紙

国立公文書館
National Archives of Japan